



南天

九条プロクはらまち

「はらまち九条の会」ニュース No. 5 0

2008(平成20)年1月17日(木)発行

＜1874(明治7)年1月17日は、自由民権運動の口火となる「民撰議院設立の建白の日」＞

国家の3要素は「領土・人民・主権」、そして近代国家というためには、国民が選んだ議員によって構成される「国会」と、国の基本的条件や大原則を定めた「憲法」が必要です。明治維新を迎えても薩長土肥の出身者による藩閥政府だったので、板垣退助、後藤象二郎、副島種臣、江藤新平、由利公正らが「民撰議院建白の建白」を発表。全国に民権運動が拡大することになる。



私は国民学校最後の卒業生

原町区二見町 佐藤邦雄

子どものころ戦争があったといふと、空襲のことや疎開の思い出話かと思われられるかも知れません。でも、阿武隈山地の村で育ったぼくらには、そういう体験はありません。そんなところにも及んでいました。

国民学校の目的は

太平洋戦争が始まる一九四一年(昭和十六)年四月から小学校は国民学校に改められました。ぼくが四年生のときです。その目的は、天皇陛下のために命を捧げる臣民(国民)をつくることでした。それを説明するのに適当な資料があります。この九条の会のニュース三二号に、「昭和十八年度伊達郡霊山第一国民学校の通信箋」のコーナーが載っていました。その「家庭の皆様へ」という言葉です。改めて、その一部を紹介します。

○私共の体は畏(かしこ)くも陛下の体です。土地も金も私の物ではない。御用となればすべてを捧ぐべきです。勿論、子供もわが子ではありません。立派に仕上げて、皆お国に捧げませう。学校はそのつもりで育てます。きびしく育てます。

(昭和十八年度福島県伊達郡霊山第一国民学校「通信箋」の言葉より)
これは、国民学校令第一条の目

的に従って、日本中の学校がすすめた教育でした。ぼくは敗戦までの五年間、こんな教育を受けてきた国民学校の最後の卒業生です。

「何のために行進するのかわかぬ」

国が示した教育目的をどのように具体化し実践しているか視察するため、県視学という役人が学校を巡って来ました。ぼくらの学校では一か月も前から、その日のために行進の訓練を繰り返して行進しました。その当日、進軍ラッパの響きに合わせた行進を見終わった県視学は、ぼくらに向かっている。このように行進をするのか」という質問をされました。

さあ、何て答えたらいいのだろう。そんなことを考えて行進したことなどありませんでした。慌てて考えました。(行進すれば足が丈夫になる。足が丈夫になれば、丈夫な体になる。丈夫な体になれば、)

「天皇陛下のためです」

その時、高等科一年の級長が指名されました。彼は元気に答えました。「天皇陛下のためです。」「そうだ。よろしい」と大声で言うな

り、直立不動の姿勢になって、「君たちは日本の少国民として、天皇陛下のために勉強したり行進したりしているのだ」と話し出しました。(「そうか、何事も天皇陛下のためにと考えればいいのか」と、それ以来のぼくは、思うようになりませんでした。

愛国少年の夢破れて

高等科二年になって間もないころ、担任の教師は神風特攻隊の新開記事を読み聞かせながら、「こうして出撃していった若い飛行兵たちは、見事、敵艦に体当たりして花と散った。皇国の臣民としての最高の生き方は、このように立派に死ぬことなのだ」と解説しました。そして話を続けました。「みんな目を閉じながら答えなさい。自分も特攻隊になろうと決心した者は、黙って手を挙げなさい」ぼくは、ためらうことなく手を挙げました。愛国少年ぶったぼくは、軍国主義の道をひた走り、少年飛行兵となって飛び立とうとしていました。

飛行兵志願に

家族みんなが猛反対

ところが、明日はその試験日だという前夜、ぼくの飛行兵志願には家族揃って反対でした。「腹が減っては戦はできぬ。何も戦場に行かなくとも飯を握って食料増産することも国のためにやることだぞ」「東京の焼け野原をこの目で見てきたが、もう日本は勝てる見込みはねえ。いま志願して兵隊になるなんて、飛んで火に入る夏の虫だわ」兄も姉も、ぼくの夢を覚まそうとしていました。(裏紙面に続く)

「人を殺すか殺されるかの戦争に 志願は親として許せない」

母は「人を殺すか殺される戦争に、志願していくなんて、親としてはどうしても許せない」と気も狂わんばかりの剣幕でした。ようやく「息子は熱を出して今日の試験に行けなくなった」と校長住宅に父が向かったのは、午前の零時を過ぎてからでした。

ぼくが国のため少年飛行兵になろうとしたことが、どうして家族みんなから、こんな反対され心配させることになるんだらう。こんなことになろうとは思ってもみませんでした。これで、これからの日本はどうなるんだらう。次々に口惜しさが胸に込み上げてきて眠れない一夜を過ごしました。ポツダム宣言を受諾したことを告げる玉音放送があったのは、その日から二日後のことでした。

「日本は神国 正義の戦争に必ず勝つ」などはみな偽りでした

ぼくらは学校で「忠孝一致」という言葉を教えられました。君（天皇）に忠義を尽くすことと、親に孝行を尽くすことは一致するということです。

でも現実はそのようではありませんでした。日本は神の国であり、日本人には大和魂があるから必ず勝つと信じこまされました。でも結果はそうなりませんでした。そしてこの戦争は、わが国の自衛のため、またアジアの解放・独立のための正義の戦争と言われてきました。しかしそれは偽りであり、戦争をやるためのイデオロギーであり、スローガンに過ぎなかつたこともわかってきました。

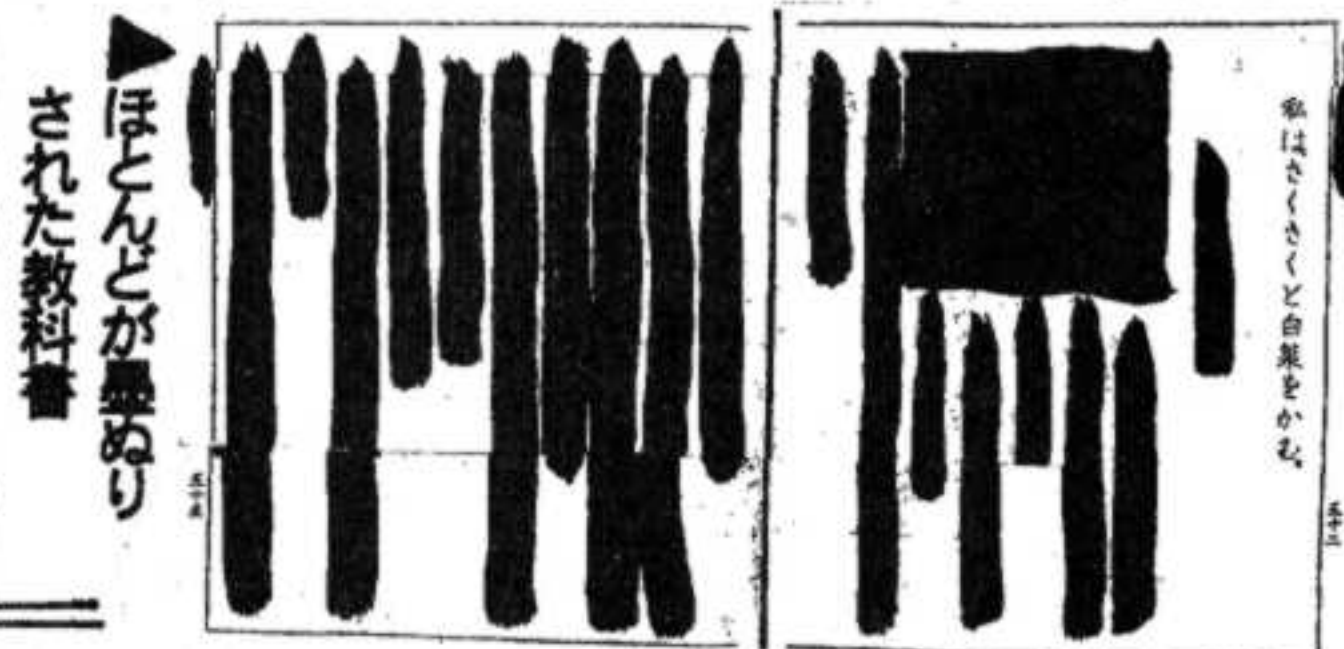
戦後、教科書に墨を塗る

戦争も昭和二十年八月十五日、日本の敗戦で終わり、ぼくらの二学期は今まで使用していた教科書から「ウソ・誤り」や「戦争」のことを書いた個所に墨を塗って消すことから始まりまりました。

その時の教科書は、恐らくどこにも残っていないと思つていましたら、たまたま岩手の、ある先生がお持ちの教科書を見せてもらったことがあります。五年生の国語の教科書でしたが、数えると二〇の教材のうち一六が、一五三ページのうち一一八ページが黒く墨で消されてありました。ぼくらの使った教科書には、こんな「ウソ」と「戦争」のことが盛り込まれていたのでした。

戦後の日本は反省から出発

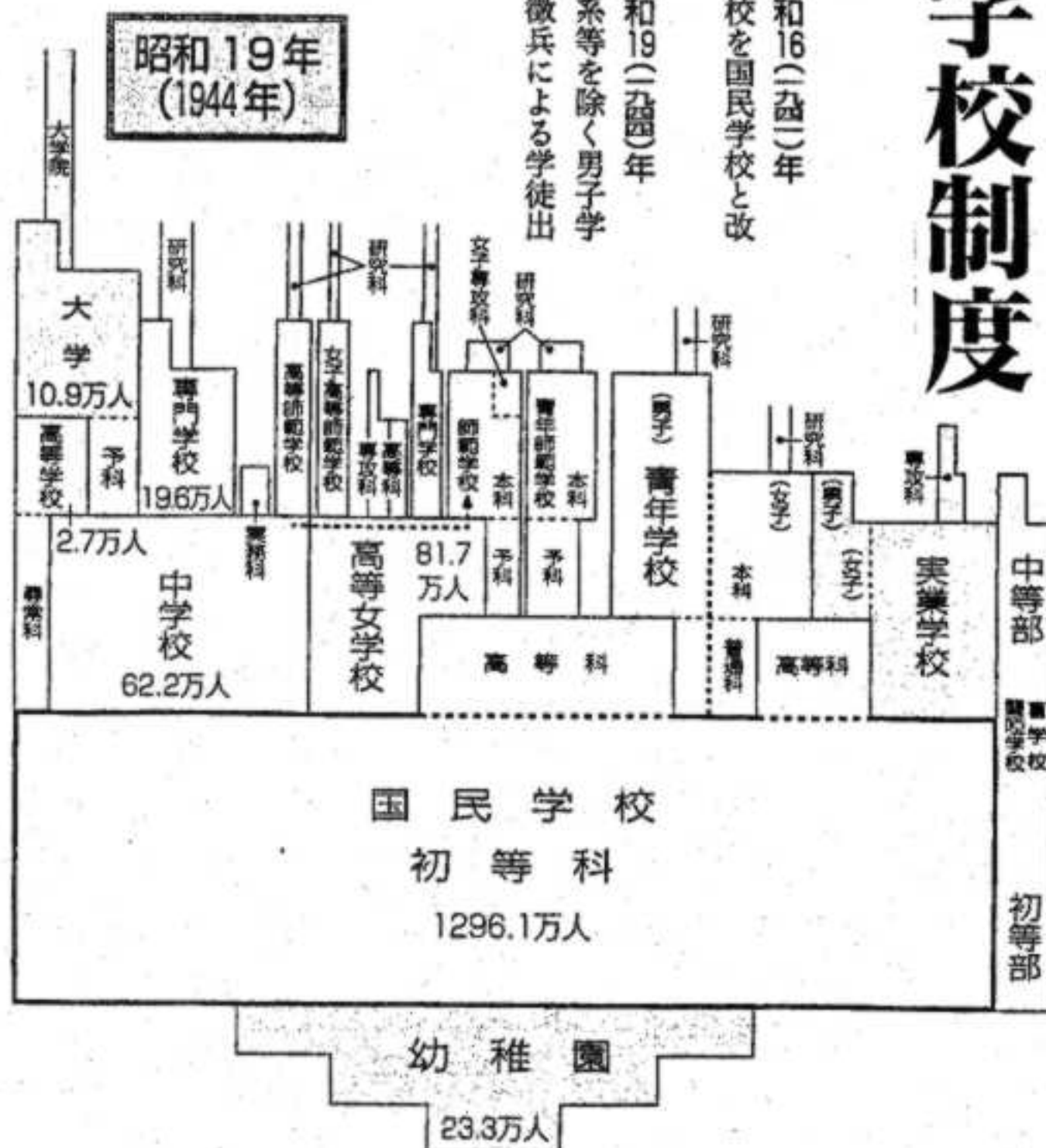
あの戦争から六〇年以上も経てば、その風化は避けられませんが、でも風化させはならないものがあると考えます。それは、戦後の日本は、あの戦争の反省から出発したということですから。そして九条をもつ日本国憲法を制定しました。そのことは忘れないで欲しいことです。これからも語り継いでいかなければならないことだと思ひます。（はらまち九条の会会長）



ほとんどが墨で塗りされた教科書

学校制度

昭和16(1941)年
小学校を国民学校と改称。
昭和19(1944)年
理工系を除く男子学生の徴兵による学徒出陣。



▼東京書籍『新総合図説国語』より

